



Title	AN HPSG ACCOUNT OF THE COMPLEX PREDICATE FORMATION IN JAPANESE
Author(s)	大谷, 朗
Citation	大阪大学, 1999, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/41321">https://hdl.handle.net/11094/41321</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、<a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">大阪大学の博士論文について</a>をご参照ください。

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	おお 谷 朗 大 谷 朗
博士の専攻分野の名称	博 士（言語文化学）
学 位 記 番 号	第 1 4 7 6 3 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 11 年 3 月 25 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当 言語文化研究科言語文化学専攻
学 位 論 文 名	AN HPSG ACCOUNT OF THE COMPLEX PREDICATE FORMATION IN JAPANESE (日本語の複合述語形成の HPSG 分析)
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 郡 司 隆 男  (副査) 教 授 中 西 暉 助 教授 三 藤 博 助 教授 由 本 陽 子

### 論 文 内 容 の 要 旨

さまざまな形態、特徴を持つ複合述語はどのように分類されるべきなのか。また、各々の複合述語はどのような点で異なりどのような点で類似するのか。そして、それらの特徴を適切に捉えるにはどのような説明が必要なのか。本論文の目的は日本語特有の複合述語形成を詳細に観察・分析することによってこれらの疑問に解答を与え、言語理論に対しても有効な提案を提示することである。

多くの言語が接辞および屈折語尾を発達させているのに対し、日本語は豊富な複合語を持つことに特徴がある。とりわけ顕著なのは動詞と動詞の結合による複合述語で、これらは単に日本語において頻繁に用いられるというだけでなく、自然言語の形式的分析の一般理論を考える際にも極めて重要な礎となる。本論文では日本語の複合語形成を分析する上で重要と思われるいくつかの構文を取り上げ、それらの統語的・形態的・意味的特徴を比較検討している。そこから判明したことは、日本語の複合述語は、語彙部門において形成された語（word）と、複数の語が統語的埋め込み構造で関係付けられた形の句（phrase）と見なすべき二種類の述語に大別されているということである。

この、複合述語における語と句の関係という重要な問題に対する具体的提案を行うために、本論文では分析の主たる枠組として主辞駆動句構造文法（HPSG）を導入している。HPSG は文法的な主辞（head）という概念を中心に据えて、語や句といった言語的対象物を部分情報構造に則して分析する。この情報構造においては、実際の言語状況において、統語情報・形態情報・意味情報といった多元的な情報がどのように配置されるのかということが、普遍原理に基づく制約を課した形で記述される。また、普遍原理は、語とそれが主辞となっている句との間の情報の共有に制約を課し、句の統語的・意味的な性質を決定している。本論文はこのような、情報の多元的表示および共有のみによって得られる単純な記述だけを用いて、複合述語が内包する情報を明示的に示しているため、その分類および類似点と相違点の比較において見通しの良い説明を提示している。

HPSG は普遍文法の原理の体系であり、情報構造として記述される自然言語の普遍的性質のみを連言的に定義しただけであるため、個別言語の分析には別途制約を設ける必要がある。本論文は日本語の性質全般を論じたわけではないが、複合述語を中心として、さらに、日本語全般を分析する上では欠くことのできない句構造の階層性、格の分布、非主辞要素の自由語順、諸現象に見られる主語指向性といった特徴を論じている。日本語は階層言語か、という議論は、主として語順の自由度と動詞句という統語範疇の存在を巡ってなされてきたが、本論文では HPSG の普遍原理の選言的スキーマの選択により階層言語としている。日本語を非階層言語と捉えてきた従来の生成文法の一部の

主張とは異なるが、言語情報の多元的側面にもとづいて語順と句構造を分離することは近年の HPSG および生成文法一般の方向性に沿うものであり、本論文はそのような扱いの利点に関して一つの証拠を提示したことになる。語順の問題を句構造から切り離したことの帰結は、非主辞要素の自由語順の説明に留まるものでなく、各構文の分析においては重要な提案として複合述語の形態的特徴を適切に捉えている。また、動詞句の存在については、格の分布等を詳細に検討した結果、設定する必要がある、複合述語の分類上も不可欠であることが、各構文の個別分析を通じて示されている。格の分布は、全ての格を直接下位範疇化情報として記述するのではなく、句構造情報を参照する形で定義されている。格の分布は、全ての格を直接下位範疇化情報として記述するのではなく、句構造情報を参照する形で定義される選言的スキーマ群によって決定される。この格原理は複合述語に見られる格交替現象だけでなく、日本語の格の分布全般を説明の対象とし、また、普遍原理の選言的スキーマにも加えられうるものとなっている。

言語情報が統語、形態、意味情報の多元的表示の制約によって特徴づけられていると考えた場合、一元的な情報にもとづいた伝統的な分類は意味をなさない。本論文は伝統的な分類では成し得なかった述語内の細分類、述語間の共通性といった複雑な問題を、情報の共有という考え方によって多元的情報間の関係として捉えている。

本論文第4章で取りあげる、受動文研究の主たる関心は、諸言語において観察される直接受動と日本語にのみ観察される間接受動を、受動文という統一的なパラダイムのもとでどのように関連付けるかということである。本論文では主語指向性等のいくつかの判別基準から、この直接・間接の区別が統語情報においては語と句の区別に相当することを主張する。本論文の分析は、その根拠を、統語的性質の違いに加え、被害性を巡る両者の意味の違いに求め、両者が受動という点では共通の意味情報を内包するにもかかわらず、各々の異なった統語情報が意味情報に制約を課すことによって意味の違いが生じていることを主張する。また、語と句の区別は形態情報にも制約を課しており、主動詞と受動形態の隣接性等に関する直接受動と間接受動の違いも説明している。

受動文で提案された統語情報上の区別を願望文、可能文に当てはめると、これらの構文に観察される目的語の格交替の説明を自然に導くことができる。統語情報の性質自体を変えてしまうような操作は唯一語彙規則において認められると仮定すると、主動詞の格パターンを変えてしまう複合述語は語として語彙部門で形成され、格パターンを保持しているものは統語的に句を形成していると考えられることになる。この、語と句の区別は、格交替の説明に留まるものではなく、従来、格の分布との関連が指摘されるものの、明示的説明が与えられていなかった状態性を巡る意味の問題や構成素形成に関する形態素の緊密性の問題も、統語情報が語と句のそれぞれ意味情報、形態情報に対して制約を課した結果として説明される。このことにより、本論文が第5章、第6章においてそれぞれ論じた願望文、可能文の諸現象の説明を通じて、多元的情報間の制約による述語の特徴づけの有効性が支持されることになる。

第7章で議論する、使役文において注目すべき現象は、使役形態を持ちながら間接受動文と同様の被害の含意を持つ構文の存在である。形態と意味の間に直接的な対応関係を仮定する伝統的なパラダイムでは、このような文は例外として扱うしかなかったが、本論文が仮定する情報の共有という考え方によれば、使役文と間接受動文の被害性に関する共通性は多元的情報間の関係として説明される。受動文の被害性を巡る述語内の細分類の説明において、形態と意味の間の直接の関係を排除したのと同様に、述語間の共通性の説明においても、使役・受動形態は、それ自体は、被害性といった意味とは直接の関係を持っておらず、そのような意味情報と結びついているのは統語情報であるとする。この点に関し、本研究は使役文の統語・意味情報を検討し、被害性という意味的關係が間接受動文と同様の統語情報、そして同様の制約によって特定されることを主張する。

使役文に関しては、いわゆる語彙的使役を考察の対象に含めると、その包括的な説明には、本論文が一貫して主張する、語と句といった統語情報の大別が有効なことがより明確となる。使役述語が語として形成されるには様々な制約があり、特に、形態的ブロッキングという現象は統語情報と形態情報の相互連帯を欠いては説明できない。この点に関し、本論文は具体的な制約の提示を課題として残しているものの、様々な例をとりあげ多元的情報の相互連帯の必要性を示している。

形態情報と統語情報の緊密な対応を排除すると、伝統的なアプローチではいわゆる補文構造として区別していたものまでも、複合述語として捉えることができる。そのような例として本論文は受益文と認識動詞文を検討している。

第8章で分析を示す、受益文は、主語指向性の判別基準からは、受動文と同じ語と句の性質を持つ述語に分類されるが、主語尊敬化における形態素の順序等においては文、すなわち補文構造のパターンを示している。しかしながら、このことは統語情報と形態情報が基本的には独立した多元的情報の一つであるという本論文の前提からは不可解なこ

とではない。本論文は受益文が補文構造相当の形態情報を持つものと仮定し、統語情報が形態情報に課す制約によって形態素の順序を説明している。また、受益文は儀礼的使役の含意を持つが、その使役の意味は、受動・使役の被害性の説明と同様に、統語情報が意味情報に課した制約として説明される。

第9章で論じる、認識動詞文では、語順の問題を中心に論じている。認識動詞を検討してみると、明確に異なる二つのタイプが存在するが、その上で語順の問題を考えると、先行研究で説明できなかった問題が、本論文で提案する語順規則と動詞のタイプによって説明できる。また、認識動詞にも、語と句の特性を認めざるを得ない、代名詞の束縛に関する事例の存在を指摘し、本論文の主張を裏付けている。

以上、本論文が章をすすめるにしたがって明らかにしてきたことは、複合述語の分類では、どの情報が共有され、どの情報がどの情報に制約を課しているのかが最も重要だということである。伝統的な日本語変形文法においては、複合述語を主動詞と接辞の結合として分析する変形論の流れと、これに対峙する考え方として、全て単一語彙として分析しようとする語彙論が提唱されているが、本論文では受動文の分析を足がかりに、願望、可能、使役、受益、認識動詞文の詳細な分析を通じて、語＝語彙部門、句＝統語部門という素朴な区分だけでは対処しきれないいくつかの言語事実を指摘し、極端な変形論や極端な語彙論を仮定するパラダイムがいずれも不十分であることを論じている。そして、代案として、HPSGの発展形として本論文が定式化した形式化の観点から、複合述語の性質を正しく捉えるためには、語彙規則によって形成された語と、下位範疇化にもとづく統語的埋め込み構造を内包する、句と見なすべき二種類の述語を認める両立論の立場が必要であることを主張している。

## 論文審査の結果の要旨

本論文は、日本語の複合述語表現を高度に形式的な体系によって分析し、その上で、それらの類似点と相違点を適切に捉えるための説明を与えたものである。接辞および屈折語尾を発達させている他の言語と比較して、日本語は豊富な複合語を持つことに特徴がある。とりわけ顕著なのは動詞と動詞との結合による複合述語である。本論文では複合述語が中心となる重要な構文をいくつか取り上げ、それらの統語的・形態的・意味的特徴を形式的に記述した上で比較し、日本語の複合述語は、語彙部門において形成された語（word）と、複数の語が統語的埋め込み構造で関係付けられた形の句（phrase）と見なすべき2種類の述語に大別されるとしている。

## 論文の構成と内容

序章に続く第2章で、明示的な分析のための枠組として採用した主辞駆動句構造文法（HPSG）を概観している。HPSGは、文法的な主辞（head）という概念を中心に据えて、構成素が部分的に情報を共有し、互いに制約し合う構造を設定して語や句の関係を分析する。統語情報・形態情報・意味情報などの情報は、語とそれより上位の句との間の局所的な情報の共有に課される制約（普遍原理）に基づいて一定の形で配置され、句や文の統語的・意味的な性質を決定している。本論文はこのような、情報の多元的表示および共有のみによって得られる単純な記述だけを用いて、複合述語が内包する情報を明示的に示している。

第3章では日本語特有の制約について論じている。日本語を階層言語として捉えた上で、言語情報の多元的側面に基づいて、語順と句構造を表示の上で分離している。このような分離は、近年のHPSGおよび生成文法一般の方向性に沿うものであり、日本語の自由語順の説明を与えるだけでなく、複合述語の形態的特徴を適切に捉えることを可能にしている。また、複合述語の分類上、動詞句の設定を不可欠としているが、これは格の分布等からも支持されることが示されている。格の分布は、全ての格を直接、下位範疇化情報として記述するのではなく、句構造情報を参照する形で定義される選言的格原理によって決定される。これは複合述語に見られる格交替現象だけでなく、日本語の格の分布全般を説明の対象とし得るものである。

第4章では「～（ら）れる」受動文を取りあげ、主語指向性等の判別基準から、直接受動・間接受動の区別が統語情報においては語と句の区別に相当することを主張している。本論文は、両者が受動という点では共通の意味情報を内包するにもかかわらず、異なった統語情報が意味情報に制約を課すことによって意味の違いが生じていることを明

らかにしている。語と句の区別は形態情報にも制約を課し、主動詞と受動形態の隣接性等に関する両受動の違いも説明している。

このような統語情報上の区別を第5章で扱う「～たい」願望文、第6章の「～える／られる」可能文に当てはめ、これらの構文に観察される目的語の格交替の説明を導いている。統語情報の性質自体を変えてしまうような操作は語彙規則においてのみ認められると仮定すると、主動詞の格パターンを変えてしまう複合述語は語彙部門で形成され、格パターンが保持される複合述語は統語的に句を形成していると考えられる。このような、語と句の区別は、従来、格の分布との関連が指摘されるものの明示的説明が与えられていなかった、状態性を巡る意味の問題に説明を与え、構成素形成に関する形態素の緊密性の問題も、統語情報が語と句のそれぞれの意味情報、形態情報に対して制約を課した結果として捉えることを可能にする。

第7章では「～（さ）せる」使役文を論じている。ここでは、使役形態をもちながら間接受動文と同様の被害の含意を持つ構文の存在に注目し、情報の共有という考え方によって、使役文と間接受動文の被害性に関する共通性は多量的情報間の共有関係として説明される。受動文の被害性を巡る述語内の細分類の説明においては、形態と意味の間の直接の関係を排除しているが、それと同様に、述語間の共通性の説明においても、使役・受動形態は、それ自体は、被害性といった意味とは直接の関係を持っておらず、そのような意味情報と結びついているのは統語情報であるとしている。

第8章では、「～てもらう」という受益文が補文構造相当の形態情報をもつものと仮定し、統語情報が形態情報に課す制約によって形態素の順序を説明している。また、語順の問題は第9章でも「～を…と思う」などの認識動詞文に関連してとりあげている。認識動詞に2つの異なるタイプが存在することを指摘し、語順の問題については、語順規則と動詞のタイプによって説明している。第10章は結論である。

以上、本論文は、複合述語現象を、どの情報が共有され、どの情報がどの情報に制約を課しているかということを明らかにすることにより説明している。従来の日本語生成文法においては、複合述語を主動詞と接辞の結合として分析する変形論と、これに対峙して、全て単一語彙として分析しようとする語彙論が提唱されているが、本論文では受動文の分析を足がかりに、願望、可能、使役、受益、認識動詞文の詳細な分析を通じて、語＝語彙部門、句＝統語部門という単純な対応だけでは対処しきれないいくつかの言語事実を指摘し、極端な変形論や極端な語彙論を仮定するパラダイムがいずれも不十分であることを論じている。そして、代案として、語彙規則によって形成された「語」と、下位範疇化にもとづく統語的埋め込み構造を内包する「句」の2種類の述語を認める両立論の立場が必要であることを主張している。

## 総評

従来の日本語生成文法においては、複合述語の研究は専ら構文別に進められており、また、枠組も変形文法が大部分であった。本論文のように複合述語を包括的に扱った研究は少なく、たとえ各構文の分析の緻密さには多少の不満は残るものの、日本語の複合述語を網羅的に研究した視野の広がり、形式的な明示性の高さは高く評価できる。特に、個々の構文における膨大な先行研究をバランスよく紹介しつつ、多くの独自の見解・提案を与えるに至っている点は本論文の価値を高めるものである。

ただし、扱う対象の広がりに応じた統一視点の提示という点には弱さがのこり、本論文での重要な主張点である、語と句の区別においても、形態論の理論的位置付けがやや不明確である点、また、個別の現象における基本的概念の詰め甘さなど、いくつかの問題点は指摘できる。もっとも、これらは今後の研究の進展により、容易に克服できるものであると判断できる。

また、諸言語の複合述語の検討から言語の普遍性を追究する立場からも、日本語から豊富な事例を検討し、その説明を提示したという点に、言語理論の発展に貴重な貢献をしている。

以上の諸点から、本論文はこの分野の研究論文として高い水準に達している優れたものであり、博士（言語文化学）の学位請求論文として十分に価値のあるものと認められる。